

講演会・シンポジウム  
「問われる共生社会」  
～津久井やまゆり園の再生を巡る議論から見えてきたこと～

開催：平成 29 年 11 月 11 日

場所：船橋市保健福祉センター大会議室

開会 12:30～

開会 主催者挨拶 NPO 法人船橋福祉相談協議会理事長 宮代 隆治

改めまして、皆さんこんにちは。ただいま紹介のありました船橋福祉相談協議会理事長の宮代でございます。宜しくお願ひ致します。船橋福祉相談協議会では、毎年この時期に皆様に関心を持っていただけるテーマで講演会とシンポジウムを開催しております。今回は去年の 7 月に起きました神奈川県相模原市の津久井やまゆり園の事件をテーマにしました。19 名の尊い命が奪われ悲しみと怒りでいっぱいになりました。19 名の皆様に哀悼の意を表する為にご一緒に黙禱を捧げたいと思います。(黙禱) お直り下さい、ご協力有り難うございました。この事件をテーマにしたのですが、私自身で 3 点気になる事があり今でも考え続けております。1 点は被疑者である彼が何故このような惨劇を起こしたのか、根底にあるものは何なのか、思いは何だったのか、それを許した社会は何なのかと考えます。事件の真相を探る大切な点だと思っています。2 点目は、彼の起こした許されざる行為に対してネット等を通じて共感の意見も沢山あり、肯定的な意見が出ていてこれも驚く事でした。これについても深く考えさせられました。3 点目は、報道の中で亡くなられた方々が匿名で、実名が語られなかった。この事実は惨劇の背景にあるのではないかと、これを許してしまう社会は何なのかと強く思いました。報道によりますと被害に遭われた方のご家族がそれを希望されたとありますが、本当にそうだったのかという事もありますしそうさせてしまう社会は何なんだろうという思いでおります。この 3 点はこれからもずっとテーマとして考え続けて、改善していかなければならない事だと思っています。今日は、神奈川県立保健福祉大学から在原さんにお越しいただきました。在原さんは紹介に書かれています通り、今回の津久井やまゆり園の再生の委員でもあられます。シンポジストとしまして、お隣の松戸市で成年後見等の活動を積極的にされている泉さん、そして今回は何より当事者の立場として横浜から奈良崎さんに来て頂きました。袖ヶ浦の虐待事件の際の検証委員、また進捗管理委員会の委員長をしていらっしゃる佐藤彰一弁護士をお招きしております。各々の立場で存分に語って頂き、その中から私自身も回答を見出したいと思っています。決して長い時間ではありませんが、今日はご一緒に考えていきたいと思っています。本日は、皆さんご参加いただきまして有り難うございます。最後までよろしくお願い致します。

皆様こんにちは。ご紹介いただきました船橋市障害福祉課長の杉森と申します。本日はこのように沢山の方にご出席され講演会・シンポジウムが開催されますことを心よりお喜び申し上げます。福祉という言葉は幸せという意味があります。福という字も祉という字も幸せを意味しています。障害者福祉という言葉は障害者の幸せと読めると思います。様々な方々が障害のあるかたの幸せの為に日々努力をされております。1975年の障害者の権利宣言から40年以上もの年月が経ち様々な法や制度ができ、障害のある人も無い人も共に生きる共生社会というものを目指しております。一昨年のシンポジウムのテーマが差別解消法についてでした。その時は共生社会に向けて前へ前へと進んでいこうとしたわけですが、差別解消法が施行されてから半年も経たないうちに津久井やまゆり園の事件が起きました。その後私共にも、船橋市の障害者施設の安全についてはどうなのかの質問が投げかけられました。簡単に答えが見いだせない状況でございます。施設の防犯設備の整備、これはとても大切なことですが施設を要塞化してしまっただけで良いという訳ではありません。何が大事な事なのか、何をすべきなのかは皆で考えて進めて行かなければいけません。ここにおいでの方皆さんもどうしてああいう事件が起きてしまったのか、これからどうしていけばいいのか、その答えを求めていらっしゃる事と思います。私も今日このシンポジウムから、これからどうしていけばいいのかというヒントを得たい、そんな思いで講演を聞かせて頂きたいと思っております。共生社会の実現に特効薬があるわけではなく、日々の努力の積み重ねに尽きると思っております。本日の資料の中に12月の障害者週間のチラシを入れさせていただきました。こうした催しの中でも障害者への理解を呼びかけて、これからも努力して参りたいと思っております。このシンポジウムを企画されました船橋福祉相談協議会の益々のご発展と本日ここにお集まりいただきました皆様のご健康とご活躍を祈念申し上げます、私のご挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございました。

## 第1部 講演 「問われる共生社会」

～津久井やまゆり園の再生を巡る議論から見てきたこと～

<講師>神奈川県立保健福祉大学准教授

神奈川県障害者施策審議会津久井やまゆり園再生基本構想策定に関する部会委員

在原 理恵氏

(宮代理事長より講師紹介)

ご紹介させていただきます。資料にあります通り、在原さんの現在のお仕事や津久井やまゆり園の再生基本構想に関する部会委員であることを載せています。在原さんは、日本グループホーム学会に所属され、ここで運営委員をして頂いております。学会の名前が“障害のある人と援助者でつくる”とありますが、支援する側だけの会ではありません。障害のある当事者の参加も大事な事となっております。当事者の方々のサポート的な役割を在原さんに担って頂いております。今回のこのテーマを設定した時にどなたをお呼びすればいいのかと考え、身近にいらした在原さんをお願いしたところ快諾して頂き、本日来て頂きました。在原さん宜しくお願い致します。

## 在原 理恵氏

ご紹介ありがとうございます、皆様こんにちは。神奈川県横須賀にある県立の大学で教員をしております。日本グループホーム学会という所で活動に参加させて頂いております。

今回お声がけ頂いたのは、神奈川県障害者施策審議会に関わっておりまして、津久井やまゆり園の再生基本構想作成に関する部会が2月～8月までありまして、そこにも加わっておりました関係で呼んで頂きました。

「問われる共生社会」と言う事ですが、なるべく簡潔にお話しさせて頂きたいと思います。テーマはこのようになっておりますが、共生社会を作っていく為にはどうすればいいかを皆で考える時間だと思っています。今回は、津久井やまゆり園の事件、特にその場に建て替えるかどうか、園の再生を巡る議論の中で色々な事を考えさせられました。この事を皆さんと共有して共生社会に向かっていく為には何が大切なのか考えたい、そういう時間にしたいと思っています。

はじめにとありますが、昨年4月の事件は皆さんご承知の通りです。犠牲になった方の数が多く、元職員の犯行だったという事も本当に信じられないという印象の特異な事件でした。社会の中で差別意識、優勢意識が広がっているという指摘が多くなされているかと思っています。重度の方を選んで狙った、能力主義の問題と関係していそうだとも言われています。なぜこの事件が起ってしまったのか、忘れてはいけない事件なのですが、今日はそこを突き詰めていくのではなくて、私達は障害のある方達と共に過ごしながら現状を少しずつでも良いのみにしていきたい。そのヒントになる事をお話ししたいと思っています。

事件後の再生構想を巡る経過ですが、昨年9月に神奈川県知事は現地で全面的に建て替えをすぐに決定しました。これは親の会の意向や運営している法人の意向をうけて、それに答える形でまずは建て直しをすぐ決めました。そこからの数か月、県の障害施策審議会などに何も図られることなく、意見を求められることもなく過ぎました。

私は、神奈川県大学の者なので、県の職員と何かあればやりとりしたいと思っていたが、この件については何も出来ませんでした。意見交換もありませんでした、時間を取って欲しいと言いましたが、ありませんでした。ああ、駄目なんだな、意見を聞こうとしてないんだなと思っているうちに数か月が経ちました。年が明けて1月に公聴会に行きました、審議会の委員や関係団体など集めて、そこで全面建て替えの方針の説明があり、皆さんの意見も一応聞きますとなったのですが、そこで物凄く色々な意見が出ました。全面的にその場で150人規模のものを建て替える事についての反対意見が出ました。反対意見等を受けて県はもっと色々な意見を聞かなければいけないという事になり審議会に部会を設けて検討する事になりました。

2月～8月まで部会で議論されるわけですが、その間4月に津久井やまゆり園の入所者の方々は横浜の方に仮居住となりました。横浜に空いていた県の施設に引越をされて、いまはそこに住んでいます。8月まで部会で議論し報告書を出しました。部会での報告書を県がどのように扱うのか不安がありましたが、報告書がそのままの形で県の基本構想案が示され県議会の審議を経て10月に正式な基本構想として出されています。それが、皆様の資料の中にはあります。細かいので持ち帰ってご覧下さい。神奈川県 HP でも見ることが出来ます。

公聴会の時に様々な意見が出たとお話ししましたが、色々な立場の方から意見が出ました。公聴会だけでなく、そこに参加しなかった方からも県に意見が届いていたようです。

ひとつ大きな声としてあったのは、入所施設の構造的な問題の指摘です。入所施設は、どうしても閉鎖的・管理的になりがちだ等の意見が色々な立場の方からありまして、同じような規模の物を造るべきではないとの意見がありました。

私自身は、入所施設の現実を中に入れて色々な事を調べたわけではないので、このような主張のもとに建て替えるはよくないと言い切るだけではどうなのかなと思っていたのが正直なところです。閉鎖的・管理的になってしまう事については施設の規模の問題でもないし、街中のGHに住めばそれで良いという問題ではないと思っています。

これは大事な事だとは思いますが、中心的な意見は、本人の意向を確認すべきであるということでした。県知事の建て替えるという判断は、保護者会のご意見や運営方針の要望に応えるものだといわれていたので、本人の意向は聞いたのですか、聞くべきではないのですか、という意見が出ていました。その通りだと思います。

県は、一応聞きました、と公聴会の時に説明がありました。年末年始を挟んだ数日間で聞き取りをしましたという報告はありました。本人にGHはこんな所ですがどうですかと写真を見せたりして聞いたそうです。GHの方が良いとの意思を示した方は10人程居たそうですが、多くの方はこのままで良いとか、家に帰りたいといった意見があったようです。本人の意向をもっと丁寧に十分確認すべきだろうと意見が出ていました。家族会の会長は「辛かった、自分達にはヘイトスピーチとしか受け取れません。」と仰っていました。

部会で、ご家族からのご意見を少しではありますが伺いました。家族会の役員の方から、お話しを伺ったなかには、突然落ち着いた安定した日常が奪われた・傷ついて疲れて先の見えない時を過ごした・とにかく元に戻してほしいという気持ち・地域移行などのベストでなくていい、ベターでいい・安心したいんだと仰っていました。気持ちは本当に伝わりました。私も何が正解なのか考えさせられました。家族会の役員の方の中にも、施設は縮小した方がいいと仰る方もいましたし、施設は自由がない、出歩けないし限られている、という方もいらっしゃいました。当然の事ですが、皆意見が一緒ではないのだなと言う事にも気づきました。

もっともな意見を出され、それに傷つく方もいらっしゃいました。これは一般的な地域移行や施設解体ではなく、この事件があつての議論であり、事件がなければ今までのままで生活していた。家族会も被害者であり、地域移行などを押し付けないで欲しいという意見もありました。この事件を機に良い方向に進めたいという気持ちと、事件を利用しないでほしいという気持ちがあり、立場の違いで難しいと感じました。資料には、対話が必要と書きましたが、この事件を巡って色々な方々が色々な発言をし色々な文章も世に出回って、ご家族の方や親しい方は読んだり聞いたりして傷ついたと思います。責める気持ちは無かったとしても、ただでさえ弱っているところにこの再生議論でしたのでとても難しかったです。

こうすべき、こうあるべき、という言い方は控えなくてはいけないなと感じました。自分が正し

いと思って発言する事であっても、時にそれが暴力的な受取になると数か月の部会の中で感じました。唯一の正解はない、という前提で自分の立場ではこれが大事だと思う、といった話し方や丁寧な限定した言い方をしないと対話が始まらないと思いました。こうすべき、という言い方をしただけで耳を塞がれてしまうという感じがありましたので、対話は大事だなと思いました。

対話といいますと、差別解消法の合理的配慮の時のキーワードと言われていると思いますが、対話は互いが違う存在である、異なる存在である者同志を認めた上での対話で、相手を否定したりしない、違う物同志であり完全に分かり合えない事的前提下諦めないで対話して、少しでも何か気づきが生まれる、新たなものを両者の間に生み出すような姿勢が対話だと思います。そういう姿勢が大事であり、決めつけず、新たに生み出すために繋げようとする姿勢が大事なのではないかと思いました。神奈川県職員にもっと色々な人と対話してほしいと思いました。色々な意見をもっと聞いて、どうしていくかを考えないといけなんじゃないかなと感じました。この4月から県の体制も少し変わってきたかなと思っています、対話はキーワードだと改めて教えられたなと思いました。

共生社会を作っていく、一つの技術が対話だと思います。家族会の問いかけで、部会では大規模な施設の建て替えではない方向で進んで行っていたので、戻る場所が無くなるのではないかとご家族は不安に思い心配されていました。施設が地域に開かれていればそれは地域と呼べるのではないのでしょうか、入所施設であっても津久井やまゆり園は地域に開かれていました、1964年に園がスタートし近隣住民を職員として雇うなどして地域に開かれた施設としてやってきました、地域に根付いて一体となってやってきた、GHじゃないと地域と言わないんですか、といったお話しが出ていました。これは、忘れられない言葉であり今も考え続けていますが、入所施設なのかGHなのか狭めてはいけないと思います。GHで暮らすのが合わない障害特性の方もいらっしゃいますので、どちらかを選ぶという話しにしてしまうのはいけない。入所施設だけでこのままずっと暮らしていくのも良くないですが、入所施設の機能を生かしていく事が重要だろうと思います。ただ、家族会からこのように問いかけられた事は、とても本質的な問いだなと思いました。

入所施設で暮らしていても、地域住民との交流があれば地域生活なのか。では地域生活とは一体なになるのか。施設のイベント等で地域と交流があればそれだけでいいのか。それとももっと日常的な交流があればいいのか。地域移行や地域生活移行という時の地域生活とは何なのか、分かりきった事であるような、でも曖昧だなと思いました。地域生活について何なのか中身をはっきり言えるように考えないといけないと、この家族会からの問いかけで思いました。

プロフィールにも書きましたが、学生時代に脳性麻痺の重度の方の介助者として関わっていたことがありました。24時間介助を入れて一人暮らしをされている方でしたが、この時に自分の価値観が揺り動かされました。この経験が根本にありますので、理屈ではなく障害の重さは関係なく、重度の障害があるから入所施設でしか暮らせないという考え方がおかしいのではないかと思います。でも私は理屈を言わなければいけない立場なので、考える必要があります。この事件で匿名報道が問題になりました。亡くなられた入所者の方が社会的に匿名の存在で扱わ

れた、生きてきた事実が入所施設で安定した穏やかな生活をしてきていても、一步でると社会的には匿名の存在としていた事が匿名報道という形になったのだと思います。入所施設でしか暮らせないという状態を替えて行かないと社会的には匿名ではない存在になってもらえないのだなと思いました。再生議論に加わらせて頂いて、基本的には津久井やまゆり園をどう再生するかの問題なのですが、そこだけに留めずに、神奈川県障害福祉施策全体に広げていくような可能性を含めての議論にしたいと思っています。やまゆり園の問題を通して、県の施策にどう繋げていくかを意識してやっています。

もっとちゃんと言葉に出来るように思っていたところに、日浦美智江さんの言葉に出会いました。日浦さんは、横浜の「朋」という重症心身障害の通所施設を全国で初めてお作りになった方です。コメントが毎日新聞に出ていまして、津久井やまゆり園関係の特集記事にコメントがありました。「人間の生きていく柱は情緒だと確信している。人は人の中で人になっていく。」この言葉を本当にそうだなと改めて思いました。障害のある人も地域生活・地域社会にさりげなく混ざり、日常の関わりがあちこちで生まれていく、そうすると相互の葛藤や衝突もあると思うがそれが大事であって、それを乗り越えるような支援がなされながら多様な関係が作られていく事が大事なのだなと感じました。その人個人が何が出来るかも大事ですが、その人個人が人との関係の中で何が出来るかが重要だなと思います。その人の可能性を大事にしていく支援が重要で、そういう出会いがある事が大切です、出会い方は本当に大切です。衝突はあっても乗り越えられる関係が出来れば双方向の影響を与え合える関係になり価値があることだと思います。障害が重いからといって入所施設で暮らすのだけではもったいないと思いました。そんな事も考えて、日浦さんの言葉をご紹介させてもらいました。

再生基本構想の報告書の中身です。ポイントについて、細かくは今日の資料をご覧ください。今後の生活の場を複数用意する事、利用者の意思決定支援の方法を具体的に示す事、これによって本人の選択の機会を保障する事、というものになっています。

具体的に複数の選択肢は何かという事ですが、元々津久井やまゆり園があった所と今仮住まいをしている芹が谷地区、その場所にそれぞれ入所機能を持った施設を建てます。相模原市も横浜市も政令市なので、県立施設なのにまた建設するのかという意見もありました。いつまでに作るという事は具体化していません。とりあえず入所施設は2ヶ所作り、意思決定支援すすめていきますのでGHで暮らしたい人は、津久井やまゆり園からGHに移る。そのGHを建てる、改修する等、そこに人をプラスアルファで置くような場合の補助は県が直接します。こういった内容を検討することを掲げています。入所機能を持つものを2ヶ所作るわけですが、それも単なる入所施設ではなく、地域生活を支援する拠点として機能を充実させる事を謳っています。将来的には新規の入所者を受け入れる場合は、目的をはっきりさせ一定のルールのもとで受け入れる。ずっとそこで暮らし続けるといった入所施設にはしない、といった事が書かれています

部会の報告書では、将来的には県の施策として広げていく事、GH入所に関してはやまゆり園関係だけでなく広げていくという事も書かれています。

一言でいうと、障害が重い人でも自分の暮らす場所を選べるような方向で考え、入所についても横浜にするのか津久井に戻るのか、こじんまりした所で暮らしたい人にはバックアップします、

GHで暮らす人にも今迄受けていたような手厚い支援が受けられるようにします、ということが書いて有ります。

この報告書を8月に出した時、小規模分散案として報道されました。津久井と芹が谷の2ヶ所に分けて作るという事に注目が集まったようです。分けられてしまうという受け止めでした。皆で揃って津久井に帰りたい、戻れる人は全員戻りたい、という事を職員も話していました。部会の議論は家族の思いに寄り添ってはくれなかった、私達を分けようとしている、というような事を言われました。しかしながら、ご家族とご本人の思いは全く同じではないかもしれない、選択が多様であること、皆で一緒と言う事が一人一人を尊重する事にならないのではないかと考えました。ご家族の言う事も分かります。ただ人間は変わりますし、ご家族が持っている情報もばらばらですし情報によっては思いが変わる事もあります。と、報告書はとりまとめました。9月から意思決定支援も始まっていると聞いています。ご家族も色々なGHを見学され、初めて見るGHをいいなと思うなど、気持ちが変わってきた方もいると聞いています。

実際に報告書が出まして、それを受けての県の構想も出ましたが、実際どう具体化していくかが大事な点になります。選択肢を用意しますと謳ったわけですが現実には2ヶ所しかなく、GHでの支援強化をします、とは有っても実際に県が運営する訳ではないので、運営主体が現れるのかどうかの問題はあります。実際に手をあげている法人もあるので、全くない訳ではないのですが、はっきりしない部分はまだあります。ご本人は選択してくださいと言われて、何を頼りに選ぶのかな、体験してみたり見てみたりしていいなと思うかどうか、経験することは大事です。見学に行ってみたり泊ってみたりと何度でもやってみれば良いと思っています。

資料に人的環境と書きましたが、身近な支援者との関係が大きいと思います。この人から支援を受けて暮らしたい、この人との関係は切れてしまいたくないと思うのは普通の事だと思います。ただ、支援者との良い関係が入所施設にあるとしても、その関係がその人の人生の可能性を狭めてしまう事もあります。本人の生活の制限になってしまうことがあります。限られた職員からでないで支援を受けたくないとなるとそれは残念な事です。人的な環境は少しずつ広げて行った方がいいと思います。障害特性によっては難しい場合もあると思うが少しずつ広げて行った方が本人の人生の為には良いのかなと思います。

岡部耕典さんが仰っていました。すごくいい職員さんからしか支援を受けられないのだとしたら親と一緒に暮らしているのと同じですよ、というような事を仰ってなるほどそうだなと思いました。少しずつ広げていくのは大事です、やまゆり園に戻るといふ決断をしても日中活動は違う所に通いたい、今の仕組みでは難しいかもしれませんがガイドヘルパーを使ったり、別の支援者との関わりを広げ本人の行動範囲を広げ、等いろんな側面を見せながら生活することも大事かなと思いました。今回の報告書で、津久井やまゆり園の再生にあたっては、日中は違う場所に通うなどして、他の社会資源と繋がる支援が出来るようにして下さい、としています。大阪の方では入所施設でもガイドヘルパーを使いながら限定的ではあるけれども出来る事があるときいています。

そうやって、信頼できる支援者を増やして行き、その先に違う暮らしの場や選択があるのはいいと思います。本人が現実的な選択が出来るようになることが大事です。

今回の事で意思決定支援がどの位出来るのかというのがポイントになってくると思います。

本人が信頼できる人を増やし、応援してくれる人を増やし、その先に選択があるというのが理想なのだと思います。選択の機会そのものというよりも、その先にある本人らしい暮らしの実現が大切です。選んだけどその先で独りぼっちでは駄目ですので、選択肢が大事だと思います。入所施設で暮らしながらも外部の支援を使いやすくする必要があります。是非そういう事を自治体の方には考えて頂きたいです。相談支援事業所が中心になって本人の経験の幅を広げながら、本人に意味ある選択肢を作っていくことが大事なのではないかと思っています。

もう一点、基本構想具体化の為に私が大事だと思っている事は、支援者をどう支えるか。基本構想では支える人を支える仕組みについては述べて居なくて、外部コンサルテーションなどを受ける位の事しか書いて有りません。支える人をどう支えるか、これは難しい事ですがすごく重要な事でもあります。本人の思いを大切にしないと疲弊してしまいます、支援者本人に支援方法や使える資源の選択肢がないと無意識に本人の希望を狭めがちになってしまいます。支援者自身の支援の選択肢を広げられるような繋がりが重要です、支援者を孤独にしない事、もっと言うと事業所を超えて職種の仲間と繋がる事も大切ですし、日中活動と暮らしの場での職員が繋がっていくのも大事な事です。何らかの気づきがあると思います。支援者が自分一人で働いているという感じがしない様にするのがいいなと思っています。

本人を理解できて本人の役に立っている実感がないとしんどくなります、長い時間をかけたから理解できる訳でもなく、長い時間関わっても分からない事もあります。支援で関わっていて本当に当事者の役に立っているのかなという辛さ、そういう事こそ助言者、スーパーバイザーやコンサルテーションする人を加えてご本人の暮らしのアセスメントをし直して支援計画に繋げていくのも重要だと思います。発達障害者地域支援マネージャーという役割も動き始めていますので、もっともっと活発にたくさんなされるようになっていくと良いと思います。

GH等、規模の小さい所では職員同士で考えていても気づきが限定されてしまうので、外からの力も活用するのも必要です。支援者をどう支えるか、視野を広げられるように、色々な所と繋がり、一人で抱え込まないように、そのことで成長出来る事が重要だと思います。成長出来ていると実感できる仕組み作りに私は関心がありますが、なかなか簡単な事ではありません。支援者の育ちを見てくれていて、役に立っていることを見てくれる人がいると良いですね。上の人だけじゃなくて、横の繋がりの中でもあるといいですね。

結論ですが、今日の話は共生社会のために私達には何が出来るかという事でしたがポイントは、主体的に生きる事という事だと思います。私達は障害の有る無しに関わらず、支援者もご家族も生きる中では皆が主体であることだと思います。当たり前ですが、それぞれが主体であることが大事だと思います。それぞれの能力の問題とは関係なく皆が生きる主体である、このことを思いました。皆が尊重されなくてははいけないのです。



部会の最終回の審議が終わった時、毎回傍聴に沢山の方がいらしているのですが、傍聴の方からお話しをされる事はないのですが、最後の時にご家族から「聞いてもらいたい」という事でお話しがありました。家族会のご兄弟の立場の方が「入所者達を分けるような決定がとても辛い、部会に対して幻滅した」といった内容のお話しがありました。表現は違ったかもしれませんがそういった内容でした。何が辛いかというと、自分に関わる重要な事を他者に決められてしまう事の辛さを訴えているのではないかなと私は受け取りました。誰もが主体で、生きる主体で尊重される事が重要だと思います。主体的に選択するとか、行動するとか出来る人であっても、その訴えに誰も耳をかさないとしたら、反応してくれる周りがいないとしたら、その人の主体性は意味をなさないです。主体的に生きる事は、その人に反応する周りの人がいないと成り立ちません。周りがある事は大事です、どんなに能力があっても一人では駄目なのです。応答する周りが必要であって、支援者は一番身近で応答する立場にあります。

神奈川にある「青い芝」の方がおっしゃった言葉で、生かされていた人間が生きる人間に変わっていく事が大事、というものがあります。脳性麻痺の方達の団体の運動グループであり、80年代に横浜でGHをはじめて作った時に中心的に動いていらした運営委員会の委員長矢田さんの言葉です。生かされてきた人間が生きる場としてGHが必要なんだ、GHで仲間たちと暮らす事で生活を自分のものにしていく、社会性を目指すためにGHで目指したいと書いていらしゃいました。なんでも自分で出来るようになるのではなくて、何の為に生きるのかを自分で自覚できるように、主体的に生きる、自分は何の為に生きるのか、社会性=主体性を繰り返し話されていました。用意された枠組みの中で、安定した快適な暮らしだけでは足りなくて、一人一人の生き方が匿名のものではなく、色々な人間関係が多様な社会の中でつくられていくような関係にあるのが必要だと思います。支援関係の中だけにその人を存在させないようにしていく必要があるのではないかな。地域社会の人々の価値観を変えていくような出会いをもつ方向性のある支援が必要なのだと思います。差別を無くすといっても一足飛びには行きません。

この事件を巡って「社会」という言葉がよくでてきましたが、社会なんか無い、皆それぞれ「私」がどうするかを考えるべきだと思います。一緒に地域で暮らそうよと言う事が大切なのだと思います。こういう呼びかけが増えていく事が必要ではないでしょうか。

私はそういう支援者を育てて行けるように考えて行ければ嬉しいです、支援者が現場でどうすれば育っていけるか、ちゃんと取り組んで発信していけたらいいなと思います。質問があれば紙に書いてください。

話しは以上です、ありがとうございました。